



に
処す

甲州遊俠伝 斬に処す

昭和四十七年一月二十五日 初刷

著 者 結城昌治

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六三三 振替東京四四三九二

印刷所 図書印刷

製本所 大口製本印刷

Shoji Yuki © 1972 検印廃止

落丁・乱丁はおとりかえいたします

六九〇円

甲州遊俠伝

斬に処す

装帧·永田力

一

甲州八代郡黒駒の、八反田という地名からとつた呼名が八反屋敷、神座山檜峰神社の神主武藤外記の屋敷で、広さ約一町四方、畑地山林にあわせて竹藪が多かった。寺社奉行の管轄だから、御禁制の賭場をひらいても代官所は手を出せない。そこに目をつけ、神主にわたりをつけたのが竹居の安五郎だった。

八反屋敷の竹藪は、たちまち恰好の賭場になった。

安五郎は苗字帯刀を許された名主の三男に生まれたが、身を持崩して無宿となり、やがて竹居村に戻って一家を張った。通称吃安、それほど吃るわけではないが、短気で、興奮すると烈しく吃った。しかし普段の人あたりはよくて、もちろん面

と向って吃安と呼ぶ者はいない。親分か旦那である。安五郎自身は旦那と呼ばれる方を好んだ。

その吃安こと竹居の安五郎、勝蔵が博徒になった頃は新島へ送られていて、子分たちが縄張りを守っていた。

「勝ちゃん、ひと眠りしてきた方がいいようだぜ。そうすれば、ツキが変わるかも知れない」

八反屋敷の賭場を仕切っている上吉田の近之助が、見かねたように勝蔵に言った。

「うむ」

勝蔵もさすがに唸った。昨夜から夜つびで張りつづけて、一時はかなりついたが、日が高くなるとともに負けがこんできた。

暑いさかりの真っ昼間である。竹藪を渡ってくる風は涼しいが、風が落ちると、むんむんするような草いきれで汗が吹きだす。

勝蔵は顎をこすった。不精ひげがざらついている

た。色白で、太い眉は精悍そうだが、粗野な感じではない。逞しいたくま体つきは草相撲で鳴らしたことがあり、さっぱりした気性が人に好かれていた。

安五郎と似て、勝蔵は上黒駒村若宮の名主小池吉右衛門の次男だった。姉きん、兄三郎左衛門がいる。

「出直すかな」

近之助に言われて、勝蔵は諦めよく呟いた。

そこへ、勝蔵の肩を叩いた者がいた。

振返ると、塩田の玉五郎だった。勝蔵といちばん気が合っている遊び仲間である。もとは小田原藩士、何が原因で士分を失ったのか甲州に流れてきて、黒駒とは金川かねがわを隔てた先の塩田村で、髪結いの亭主におさまった。遊び人の前歴はあてにならないが、死んだ女房が髪結いをしていたことは事実で、筆もたつし、剣術の心得もあるようだ。た。

「なんだい」

勝蔵は振返ったまま聞いた。

「用がある」

「だから聞いているじゃねえか」

勝蔵は不機嫌だった。

玉五郎は答えないで背中を向け、五、六歩先に立った。

勝蔵は已むを得ず腰を上げた。どうせ引揚げる気になっていたところだった。

勝蔵は、玉五郎に追いついて肩を並べた。勝蔵の方が三寸ほど高かった。肩幅も勝蔵の方が広い。

「戸倉の旦那が呼んでいる。話があるそうだ」

「どんな話だ」

「行けば分る」

「おまえは知ってるのか」

「一応の話は聞かせてもらったが、とにかくおれは使い走りだ。戸倉の旦那に聞いてくれ」

戸倉の旦那というのは、山林の売り食いだけで
楽に三代や四代は寝て暮せるという近郷きつての
大金持、堀内嘉平次のことである。

その戸倉の旦那が、いったい何の話があるとい
うのか。

勝蔵は首をひねった。

玉五郎の様子も妙に思わせぶりで、いつもと違
っていた。

「厭な話か」

勝蔵は気がかりで、念のために聞いた。

「どうか」

玉五郎の返事は依然煮え切らない。

「おれは呼ばれたから行くとして、おまえもいっ
しょに行くのか」

「いや、おれは呼ばれていない」

「呼ばれたのはおれ一人か」

「たぶん」

「たぶん？」

「知らねえってことさ」

「ふん——」

勝蔵はおもしろくなかった。戸倉の旦那に呼ば
れたからといって、わざわざ出かけていく筋合ひ
はないと思った。

雲ひとつない空は、太陽がカンカン照りつけて
いた。

八反田から戸倉へは、いったん生家のある若宮
に出て、金川沿いの山道を一里近く上らねばなら
なかった。

しかし勝蔵は、八反屋敷をぬけて玉五郎に別れ
ると、足が自然に戸倉へ向った。話というのが気
になったし、堀内嘉平次は、子供の頃から勝蔵を
可愛がっていて、勝蔵も親しみを抱いている老人
だった。

二

戸倉は三十戸ほどの小さな村だが、堀内嘉平次の母屋は大きな一本杉が目印だった。

勝蔵が訪ねたとき、嘉平次はその一本杉の日陰になった縁側で、煙草をふかしていた。ゆかた掛けで、色の浅黒い小柄な年寄りである。

勝蔵は、玉五郎に聞いてきた、と言った。

「まあ腰をかけなよ。しばらく見えなかったじゃないか」

「へえ」

「眼が赤いな」

勝蔵は昨夜から一睡もしていない。

もちろん嘉平次には、勝蔵の眼が赤い理由が分っているのだ。勝蔵が家に寄りつかず、酒や博奕をおぼえて遊びまわっていることは、黒駒近辺の

者なら大抵知っているはずだった。特に、勝蔵の父親吉右衛門と親しい嘉平次の知らぬわけがなかった。

勝蔵はうしろめたい気持がしたが、とにかくどんな話か聞くだけ聞こうと、腹をきめて縁側にかけた。同じ叱言でも、父親に言われるより、嘉平次に言われた方が素直に聞ける勝蔵だった。

「遊びがおもしろいようだが、まだ飽きそうもないかい」

「――」

「そうだろうな。やめられないのが遊びってものかも知れない。やめろと言われて、おまえがおとなしくやめるとも思っていない。だが、きょうは少しあらたまった話をする。打割ったところを聞かせて貰いたいんだ。おもんのことは、どうしても忘れられないか」

「――」

勝蔵は視線を伏せ、下唇を噛んだ。おもんの話なら聞きたくなかった。

「そうか。分ったよ。余計なことを聞いて済まなかった。あっさり諦めがつくようなら、おまえもぐれたりしなかったろう。しかしな、このまま遊んでいて、先行きをどうするつもりだ。おまえだって、もう二十五だろう。年でどう言うわけじゃないが、もし勝手にしたいというなら、それは親兄弟に迷惑をかけない男の台詞だ。おきんさんの縁談が破談になったよ」

「破談に？」

勝蔵は思わず聞返した。

姉のきんは、加茂村の名主のところへ嫁ぐ話が決っていた。病弱のせいで縁遠かったが、ようやく丈夫になって縁談がまとまり、結納も取りかわしていたはずだった。

「急に向うさんから言ってきた。口を濁している

が、理由はおまえのことしか考えられない」

「破談というのは、本当ですか」

「おまえに嘘をついても仕様がな。家の者に聞かなかったのか」

「――」

勝蔵は返事につまった。家の者に聞くにも、最近はずっと帰宅していなかった。たまに帰っても、家の者とはろくに口をきかなかった。

きんは弟思いの姉だった。それに気丈な女だから、縁談が破れたことは勝蔵に知らせないように気を配っていたのかも知れない。

勝蔵は顔を上げられなかった。

意外な話で、衝撃が大きかった。破談が事実なら、確かに自分のせいだろうと思った。この一年あまりの間、勝蔵の噂といえは、おそらくどこで聞いても、酒と博奕と喧嘩沙汰だった。以前が真面目だっただけに、その烈しい変りようは人びとを

驚かせたに違いなかった。そんなやくざな弟がい

る娘を、まともな家で嫁に迎えるはずもなかった。

「百姓をやつてゆく気はないのか」

しばらく黙つたあとで、嘉平次が言つた。

勝蔵もそのことを考えていた。

しかし、勝蔵は首を振つた。百姓はもうごめん
だと思つた。遊び癖がついたせいではなかった。

朝の暗いうちから日が暮れるまで、汗を流して働
いて、そしてようやく実つた米や麦は、代官所の
役人どもにふんだくられるだけではないか。

ふざけやがつて――。

と勝蔵は思つた。もちろん、おもんのことも頭
にこびりついていた。おもんは、石和代官所の代
官清水孫次郎の妾にされたのである。

「百姓は厭か」

「厭です」

「商いもできまい」

「できません」

「あとは聞くだけ野暮なようだが、どうするね」

「家を出ます」

「出てからのことだ」

「出てから考える」

「相変らずだな。いかにも勝蔵らしいが、世間は
それほど甘くない。今までと違うぞ。動く前に考
えろ。考えてから動くんだ。分るか」

「もう家には迷惑をかけない」

勝蔵は腰を上げようとした。

「どこへ行く」

「――」

勝蔵はあてがなかつた。家に戻らないとすれば、
また八反屋敷に戻るかなさそうだが、博奕を打
つ金は使い果たしていた。

「だから、動く前に考えろと言つたじゃないか」

嘉平次は、勝蔵の気持をやわらげるように笑つ

た。

三

「話はまだこれからだ」
と嘉平次はつづけた。

金川を境に、北側が勝沼の祐天仙之助ゆうてんと國分こくぶの三藏の縄張り、南側の黒沼から竹居の一带が安五郎の縄張りだった。

金川は御坂山峡に源流を発し、代官所のある石和宿で笛吹川に合流する。

祐天と三藏は甲府の大親分三井の卯吉の盃を受けていて、もともと安五郎とは仲が悪かった。それが安五郎が新島へ島送りになると、その留守に縄張りを広げようとする祐天や三藏の一味と、安五郎の子分たちの間で始終いざこざが絶えなかった。しかも、祐天、三藏の方は代官所が後押しを

している。安五郎一家は押され気味である。

安五郎びいきの堀内嘉平次は、代官所の後押しも面白くないが、安五郎の縄張りが荒らされるのも面白くなかった。代官所は年貢を取立てるばかりで、土地の治安はやくざ者に頼らざるを得ない状態なのである。

「そこでだ——」嘉平次は煙管きせるをはたいて、あぐらをかき直した。「私とおまえのおとっさんとは幼馴染だ。今でも兄弟のように仲よくしている。そのおとっさんに相談されたとき、私はおまえを預からしてくれと言った。なにも、おまえを赤ん坊の頃から知っているとって大きな顔をするわけじゃない。この頃のおまえの様子をじっと見ていて考えたんだ。もし気が向いたら、ここからちよっと下ったところに屋敷を一軒あけておいた。飯めし焚いたきの世話まではできないが、二十人や三十人は寝泊りできるだろう」

「その話、おやじは承知ですか」

「承知とは言えないが、黙って聞いてもらった」

「兄きは」

「おとっさんに聞いたろう」

とすれば、姉のおきんも聞いているに違いない。

勝蔵は家を出るといったが、それは村方人別帳むらかたどんべつちよう

をはずされて、無宿者になることを意味していた。

そうしない限り、勝蔵が過ちを犯した場合、親兄

弟から親類にまで迷惑が及ぶのである。身内に一

人でもやくざがいては、両親は肩身が狭く、姉は

嫁にいけないし、兄も嫁をもらうのが難しい。

それが分ったから、勝蔵は無宿になる覚悟を決

めたのだった。

「いいかい。おまえは若いんだ。決して自棄やけにな

ってはいけない。吹込んだように気がさすが、で

きるなら堅気でいて欲しい。それがおとっさんた

ちの本当の願いだ」

「いや、おれはもう決めてしまった」

「人別帳をはずされて構わないのか」

「構わない」

「道楽で渡世はできないぞ」

「分っています」

「そして最後は野垂れ死だ」

「それも分っているつもりです」

「渡世には難しい仁義がある。多少は見聞きして

いるだろうが、それをどう思う」

「くだらないようだ」

「その通りさ。だが、仁義じゃなくて便宜だと思

えば、そうくだらないこともない。渡世人の間で

しか通用しないような、義理とか人情は信用する

な。分るか」

「考えてみる」

「よく考えることだ」

「おれのような野郎が一家を張って、安五郎一家

の者が黙っているだろうか」

「笑わせるな。誰が一家を張らせると言った。そんなことを言うのはまだ早い。ただ、おまえについて、上井出の親分よろしく頼んでおいた」

勝蔵は竹居の安五郎を知らなかった。顔を見かけた程度で、口をきいたことはない。

しかし上井出の熊五郎なら、八反屋敷の竹藪で何度も顔が合っていた。安五郎の子分だが、上井出に一家を張って親分と呼ばれている。沢登の伴兵衛、一つ谷の浅五郎らとならんで、安五郎の留守を守っている主な一人だった。

もっとも、新島へ流された安五郎の方は、流刑は本来終身刑だから、留守といっても帰る当てはなかった。

しかし安五郎は不思議な人気があって、のちに新島を脱け出してくるが、留守中の一家の結束は堅かった。その結束は、祐天や三蔵に対抗するた

めもあったに違いない。

「上井出の親分も、おまえの様子を見ていたらしい。話をしたらいい顔をしてくれた。おまえの気持次第だが、八反屋敷の竹藪を使えるように計ってくれるそうだ」

「ふむ」

勝蔵は何となく慚然とした。上井出の熊五郎に、どこをどう見られたか知らないが、あまりにうまく話が運んでいるようだった。すべてが勝蔵を無宿にするためのお膳立のようだ。

しかしまあいいや、流れる方へ流れてやれ、勝蔵は捨鉢にそう思った。代官所に対しても、祐天や三蔵に対しても、反抗したい思いが胸いっぱいにつまっていた。

その勝蔵の横顔を眺めながら、
「約束して欲しいことが四つある」
嘉平次は難しい表情で言った。

四

約束の第一は世帯を持つということだった。

「女に惚れるのは構わない。だが——」と嘉平次は言った。「無宿というのは、世間のはずれ者だ。

まして博奕打ちなんてのは、おてんとうさんをまともに仰げる稼業じゃない。世帯を持ったら、女房や子供を泣かせるだけだ。惨いことを言うようだが、無宿はおまえひとりで沢山にしてくれ」

「——」
勝蔵は横を向いたまま頷いた。言われなくても、世帯を持つ気はなかった。

「次ぎは、堅気の衆に迷惑をかけない、というより、堅気の衆を大事にして欲しい。これは吃安さんがよく言っていたことだが、百姓でも商人でも、堅気の衆はお客さんだ。博奕打ちは自分で博奕を

打つのが渡世じゃない。お客さんに気持よく遊んでもらって、そのカスリを頂戴する。汗水流して働いた稼ぎの、カスリをこぼしてもらうだけで有難いと思わなければいけない。損得ずくで考えても、堅気の衆に迷惑をかけることは、自分たちの渡世に泥をかけるようなものだ」

安五郎の裏庭には、吃安のお仕置場と言われる草藪があった。その草藪で、安五郎は、素人に無法な真似をした子分たちを容赦なく懲らしめたという。

「吃安さんも、若い頃はおまえに負けず劣らずの乱暴者だった。博奕打ちのくせに、曲ったことが嫌いというのもおかしいようだが、曲ったこととはにかく嫌いだった。そのため、渡世人の間では煙たがられ、作らなくていい敵まで作っているが、堅気の衆には怖がられも憎まれもしなかった。まるで村で頼んだ用心役のように、素姓の知れない

流れ者のやくざや浪人などから、村のひとを守っていた。おまえは、吃安さんが島へ送られたわけを知ってるかい」

「博奕のせいと聞いている」

「それだけが理由じゃない」

安五郎が捕った嘉永三年頃は、阿片戦争による清国の敗北で、徳川幕府の鎖国政策が土台ごと揺すられていた。勤王思想が起るとともに、外国船が現れたら打ち払うべしという攘夷論がさかんだった。

といって、急場の間に合う軍備はなかったし、権力の衰えた幕府には大砲をつくる金もなく、攘夷論は国際情勢の展望を欠いた強がり過ぎなかつた。

そこで児童に類するが、寺院の釣鐘や黒塗りの樽を海岸にならべ、砲台に見せかけようという案が各地で実施された。いかに窮余の一策とはいえ、

粗末きわまるこけ威しだった。

時の伊豆韮山代官、江川太郎左衛門は早くから砲術を学び、のちに大砲鑄造のため韮山で反射炉の建造にかかった先駆者だが、一応幕府の方針にしたがって釣鐘や酒樽を海岸にならべた。

こういうとき、いちばん手っ取り早く役立つのは、無職渡世のやくざ者たちだった。釣鐘をならべておくだけではインチキがバレてしまうから、なるべく多勢の人間を周囲にうろうろさせておく必要がある。

土地の親分大場の久八は、太郎左衛門の意を受けると、たちまち子分を駆け集め、足りない分の助っ人を兄弟分の竹居の安五郎に求めた。

安五郎は政治のことなど分らない。分らないというより関心がない。兄弟分の久八に頼まれれば厭と言えない性分だったから、これも子分を七、八十人あつめて駆けつけた。

ところが、もともと無宿のあぶれ者たちである。

それが海べりを毎日ごろごろして、博奕を打つ以外に時間の潰し方がない。となれば、附近の百姓や漁師との間に、いざこざが起るのは当然の成りゆきだった。

おそらく、代官所は手を焼いたに違いなかった。いつまでも、ただで遊ばせておくわけにもいかなし、先の見える太郎左衛門は、見せかけ砲台の愚を逸早く悟ったとも考えられる。

「それで吃安さんはお召捕りになってしまった。

お代官の腹の中は厄介払いだった。親分がいなくなれば、子分たちはちりぢりに消えるしかない。

御召捕りの初めの理由が、吃安さんが子分をつれて駆けつけたときのこと、大名行列の真似をしたのが不屈きだというからバカにしている。そして、それだけじゃ島へ送れないので、博奕の科を加えたと聞いた」

「ひでえ話だ」

「おかみのやることは、そんなものさ。よく憶えておいた方がいい。やくざなど人間の勘定に入っていない。江川様は石和代官をしていたことがあって、吃安さんとも顔見知りだったはずだ。だから、吃安さんも張切って駆けつけたんだろうがね。しかし吃安さんというひとは、納得のいかない仕打ちを受けたら、おとなしく辛棒してるような男じゃないよ」

「島へ送られたのはいつですか」

「お召捕りの翌年だ。それからもう五年になる」

「長いな」

「長いとも。島の五年は、娑婆の十年より長いはずだ」

嘉平次は安五郎の顔を思い浮かべるように、一本杉を見上げて眼を細めた。

勝蔵も安五郎を思い浮かべた。年齢は勝蔵より